

---

# 戦闘機人TYPE1st

リュウジ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦闘機人TYPE1st

### 【Nコード】

N6910Z

### 【作者名】

リュウジ

### 【あらすじ】

小学4年生ながらも少なからず自分の人生を投げ出していた斬空<sup>きんくう</sup>。  
無人<sup>むひと</sup>。

いきなり重症をおった彼を助けた科学者がいた

## 人間じゃなくなった日（前書き）

初めましてリュウジです。 気長に小説を更新していきたいと思いま  
す（暗に亀更新）

こんな作者と小説ですがよろしくお願いします

## 人間じゃなくなった日

先生「そんじゃ来週になりたい職業、夢の作文書くから考えとけよ」

生徒「はい」

無「……………」

小学4年生も終わりに近づいた冬下がり

人当たりが良くて評判の担任が将来……つまり未来に自分がなりたい、したいことの作文を考えておけと言った

大抵の生徒は小学生らしく憧れや希望を少なからず持っていて、早速明るい将来のことについてどんなことを書こうか曇りない笑顔で話し合っている。

そんな中で一人だけ浮いた子供がいた。その生徒の名前は斬空きそく 無む人ひとといい、小学4年生とは思えないほど自分に出来ないことのほうが出来ることより多いことを知っていた

「……………はっ、将来かあ」

そんな未来のことを今聞かれても困るんだよな

そもそも仮に将来の夢が決まっていたとしてもなんでわざわざ作文

にして周りに知らせなきゃならないんだ

「無人、お前さ、将来何になりたいんだ？俺は警察官になって悪い奴を倒してやるんだ！」

『……まだ決まってるない。光多、警察官は逮捕が仕事であって倒すのはちよつと違うぞ？』

光多がなりたいのは警察官じゃなくて正義のヒーローじゃないのか？でも満面の笑みで夢を語る光多を見ると自然と晴れた気分になってくる

光多「なら俺と一緒に警察官目指そう！んで逮捕しまくろうぜ」

『あー……誘ってくれるのは嬉しいんだけど、やっぱりまだ考えたいんだ。だからごめんな』

光多「ちえー……まあ、無理ゆう気もないけど」

『ははっありがとな。じゃあ俺帰るよ』

口を尖んがらせる光多におもわず苦笑してしまった

光多「じゃあな〜！」

俺は帰りながらどんな嘘で作文を書こうか考えていた

『……………警察官はないな』

光多には悪いけど警察は綺麗な職業じゃない。いや、警察官だけじゃなくて大半の職業は裏で汚職する人間や自由がきかず、ロボットのような変わらない毎日を送るだけだと思う。  
今でさえ変わらない毎日に退屈しているのに

俺はそんなのは嫌だ。せめて自分のやりたいようにしたい

決まらない思考を一旦切り上げて俺は憂鬱で空を見上げた

『はあ?』

え?なんだあ

『...がつ...い、.....!!??!!?』

何が起こった!?

『あ、あああああ!!!!!!!!』

痛い痛い痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ!!!!!!

全身を血みどろにしても痛みがこなかった無人の体はやつと追いつ

いた痛覚が容赦なく無人に生き地獄を味合わせる

無人はいくら大人びていても小学生4年生だ。大人でさえ耐え切れない傷と痛みに抵抗できるはずもなかった

ふいに、ぼやけていた視界が影で真っ暗になった

『……………？』

……………なんで目を開けているのにいきなり暗くなっただ？死ぬ寸前だから？

『……………はっ、なんだ俺……………結構余裕だな、俺はまだ自分が正常な思考を保てていることに笑った。普通は痛みで発狂するんじゃないか？死ぬ時に冷静になるっていうのは本当なんだなと思いながら自分を嘲笑う

「おや、生きているとは。しかしこれは酷い姿だね」

影が喋った？いや、喋っているのは人間で間違いない。しかも今の俺を見て冷静ということは一般の人間じゃないな

「君に問おう。君は生きたいかい？最も、生きたいなら人間じゃなくなるがね」

『……………生きたい』

……………最後に聞こえたのは高笑いだった

## 半分機械になった日

『……………なにこれ？』

眼が覚めた瞬間に違和感があった

何か機械のような物でほぼ全身が包まれてる？

……………分かることは結局昨日俺が死ななかったことだけか

「おや、眼が覚めたようだね。私の最新の技術を用いて作った体なんだがなにか不備はあるかい？」

『えっと、不備はないです。若干の違和感と頭に響く機械音が少し気になるだけです』

本当によく出来てる体だと思う

「ふむ、左目は見えているようだね」

『左目？』

「ああ、気づいていなかったか。左目は負傷が大き過ぎて機械に替えさせてもらったよ。どうだい？素晴らしい視力とクリアな視界だろっ！？」

『わあっ！興奮しないで下さいよ！』



それにしても……まあ、興奮しているのも怖いんだけど、それ以上に左目が違和感なさすぎて気づかなかった

どこの技術だろう？少なくとも日本じゃ有り得ない

意識してみると左目からキュインっていう機械の音がした。多分中でモノアイやらカメラやらが動いているんだと思「

「しかもただ視力が良くなったただけではない!!」

『またですか!!』

「その左目には戦闘機人システムの一つ、IS<sup>インヒューレントスキル</sup>が備わっているのだよ!!」

『な、なんだってー!!』

いや、雰囲気でだいたいの意味は分かるけど専門用語ばかりいわれたら困る。ちゃんとした意味が分からない

「……………そんなあからさまに棒読みで驚かれると流石に傷付くんだがね。私も熱くなっていたようだ、まず君には現状を知らせないといけないというのに」

『助かります』

ジェイル「私の名前はジェイル・スカリエッティというまあ、科学者だよ」

マッドサイエンティストですね、分かります

『俺は斬空 無人です。ジエイさんって呼んでいいですか？』

ジエイル「構わないよ。さて、無人君。無人君は晴れて名前と同じように人では無くなつたんだが『余計なお世話です』失礼。なら君がもう人間に混じって生活出来ないことは分かるかい？」

『分かりますよ。もし俺の正体がばれたら化け物扱いされるかジエイさんのようなマッドな人に一生研究されて改造される地獄を味わうだけでしょう？』

ジエイル「……私はマッドではないんだがね『マッド中のマッドですよ』……まあ、確かに人には違法とよばれる研究ばかりしているがね。それより、君は頭が良いみたいだね。こんな状況になっても臨機応変にかつ柔軟に思考出来る者はなかなかいない。端的に言う」と私の口から説明する必要はないのだよ」

『なんでですか？』

ジエイル「君のブレイン補助データチップ、君のもう一つの脳のよきな物に必要なデータを入れておいたからだよ。ふむ、物は試しだ、データを引き出すように思考してみるといい」

『……それはまた凄い技術ですね。脳と機械がリンクしているってことですか？』

ジエイル「ふははははは！実に助かるよ！説明の手間が省けていい。もっと詳しくいうなら君の脳から発信するマイク口脳波と電気信号がデータチップに受信、もしくはデータチップから発信するのだよ」

へーますます凄いくピー、システムオールグリーン。確認中……、  
以上なし。今からデータの引き出しをします>

『うわあっ！！俺の肩？から機械音がでた！？』

ジェイル「君の肩には簡単にいうとアダプターがついていてね、そこからコードを繋げたりするんだが、必然的に肩からデータ分析の状況が発声されるようになってるのだよ。どうだい？必要なデータは引き出せたかね？」

『ええ、全部分かりました。俺は戦闘機人とよばれるプロジェクトFの次の段階のプロジェクトで初めて人間から作られた成功体、戦闘機人TYPE1st。ジェイさんは次元管理局？に顎で使われてるってところですか』

ジェイさんも苦勞しているんだな。結局違法だけど

ジェイル「合っているよ。まあ、すぐに抜け出すんだがね。それにしても驚かないのかい？」

『驚いてますよ。ただ俺の機械の部分が正常に動いているだけです』

ジェイル「それは良かった。さて、無人君には私の助手をしてもらいたいんだがね。君のチェックもしなければならぬし、機材の揃ったこの部屋を自分の部屋にしてくれたまえ」

『分かりました』

暫くは退屈しなさそうだな。……世間からどれだけ生命の冒涇だとか悪だとか言われることをするとしても

## No.1が出来るまでの日

『それでジェイさん。俺はどうやって手伝えればいいんですか？まさか俺とジェイさんだけで研究開発するわけじゃないですよね？』

ジェイル「勿論、私の他に各専門分野のエキスパートの研究員がいるよ」

『良かった。ここでジェイさんが二人でやるとかいいでしたら夜逃げするところですよ』

ジェイル「安心したまえ。私がチーフをしているが部下も優秀だ。ただ困ったことに上のスポンサーが馬鹿ばかりなのだがね」

あゝそれは分かる。データの情報でも管理局は俺達正義（笑）の集まりだったしな

『例えばどんなのですか？』

ジェイル「まあ、待ちたまえ。管理局の無能さを知らしめるにはとびつきのネタがあつてね。

無人君、何で君が死んだか分かるかい？」

あれ？そういえば分からないな……上を見上げたら閃光？が光ったように見えただけだもんな

ジェイさんが凄いにやにやしてるのけど俺ってそんなにあほな死に方だったのか？

『そういえば気になりますね。俺の死因って一体なんなんですか？』

ジェイル「君の死因……………それは!!」

『……………くっく』

ジェイル「私を上空から撃とうとした管理局魔導師の誤射なのだよ!!」

『……………はあ？え、ちょ、俺の耳が壊れたんですかね？もう一回  
いって下さい』

<ピー、確認中……………聴覚、鼓膜、その他の機能に問題なし。正常です>

ちょ、うるさいな俺の肩

『あれですか？ジェイさんを上空からあほみたいに遠距離で狙った  
屑魔導師のとはっちりをうけて俺死んだんですか？しかも非殺傷設  
定もなしですか』

ジェイル「全くもってあさつての方向に放たれた一撃だったが多分  
間違いないと思うよ」

『俺、今から管理局壊してきていいですか？つかジェイさんも俺  
の死因の一部じゃねーか』

ジェイル「安心したまえ無人君。仇は私が討った!!」

『ドヤ顔で親指立てるな元凶!!』

ジェイル「それは八つ当たりというものはあつ!!」

俺の戦闘機人版右ストレートがジェイさんの右頬を捉えた

~~~~~

『…………さて、スッキリしたところで話を戻しましょうか』

ジェイル「ちよつと待ってくれないかね。メガネが壊れたから予備をかけたいのだよ」

『なんか自然に壊れましたもんね、メガネ』

ジェイル「いや、壊したのは君なんだが……」

『それで、結局どんな戦闘機人を造ればいいんです?』

ジェイさんがなんかいつてるけど知らん

造るにしても用途があるはずだからな。例えば量産できる有能な人員が欲しいとか、初期スペックがチートで更に成長していくとか

ジェイル「ふむ、研究コンセプトは<高位魔導師を倒せる性能を持ったサイボーグ>だよ」

『成る程、なら魔力AAは必要ですね。擬似リンカーコアは作れる

んですか？」

ジェイル「ふむ、その点は問題ないのだがね、問題は機械の性能に生身の肉体が耐えられないことだよ」

『走った瞬間に皮膚がちぎれるってことですか。……………怖いですね、俺その光景絶対見たくないですよ』

ジェイル「そうならないために今案を出しているのだよ。今から私の研究班のところに行くから着いてきたまえ」

『えー…………ジェイさんみたいなマッドが沢山いるとこなんて行きたくないですよ。一人でいって下さい』

寄ってたかつて解体されるなんて嫌すぎる

ジェイル「…………君も言葉に遠慮しなくなってきたね。万が一無人君をバラそうとする輩がいたら私がそいつをバラしてあげるよ」

『ジェイさん……………』

初めてジェイがかっこよく見えた。俺をそんなに大事に思ってくれていたなんて…………

ジェイル「無人君は私の大事な作品だからね」

『大事の意味が違っ！！』

ジェイル「あぁっ、暴力はやめたまえ！君の腕力は戦闘機人になって大分強ぶはっ！！」

俺の右拳が二度目の唸りをあげた

~~~~~

『いやーそれにしても廊下長いですねジェイさん』

さつきからずっと二人の足音が廊下にかっーんかっーんと響いてる

ジェイル「まさかたった30分の間にメガネが二個も壊れるとはね  
………… もうメガネじゃなくてコンタクトにするよ」

『物は大事にしないといけませんよ？全く、いい大人のくせに……  
……』

ジェイル「だから壊したのは君なのだがね…………… もうすぐ着くよ」

ああ、あの扉か

<IDカード確認しました>

なんかいかにも嚴重そうな扉を開けた

ジェイル「ふはははは！！見たまえよ無人君、ようこそ、私の城（  
研究室）へ！！」



『ちょ、ジェイさんうるさいですよ』

そんな大声でしたら他の研究員に迷惑が……

研究員「……………」

『うわあ、仮にもチーフが来たのに見向きもしませんよ』

こんな痛い人が来たのに無視なんてただ者じゃないな

ジェイル「仮ではないのだがね。科学者とはそんなものだよ」

ジェイル・ス仮エッティ……………あんまよくないな

研究員「ドクター、後ろの少年はどうしたんです？モルモット（実験動物）ですか？」

さらりと恐いこといったよこの研究員！？

ジェイル「ふ、ふははははははは！！諸君！驚きたまえ！！ここにいる斬空 無人君は昨日、人間から戦闘機人になったのだよ！！」

研究員「なん……………だと！！！！」

『ノリいいなあんたら』

研究員「つまり過程は違えどその子供がこの戦闘機人の完成形なのか……………」

女性研究員「いや、それだけじゃないわよ！  
無人君はもう成長しない……………つまり！！」

『つまり？』

女性研究員「つまりエターナルシヨタなのよ！！」

女性研究員「はうつ……………」

『いや、はうつじゃねーよ！！』

そういえば俺もう成長しないのか……………一生10歳児体型とか泣ける

17

女性研究員「素晴らしい……………素晴らしい過ぎるわ。永遠に愛でることの出来る男の子……………私はこれを求めてたのよ！」

『あんたら戦闘機人の研究してたんだよな！？』

つーか目つき恐いんだけど？

ジェイル「あー諸君、無人君を愛するのは後にしてくれたまえ『一生愛でんていいわ！』無人君は高速移動などの戦闘は出来ない。やはり生身だと限界があるのだよ」

研究員「……………」

今更キリッとした顔になっても第一印象のせいで台なしだな

しかも全員が机に肘ついてシ○ジ君のお父さんみたいだからシユー  
ルすぎる

ジェイル「私たちは一つの細胞から素体を作らねばならない。この  
段階はプロジェクトFとなんら変わらない。しかし、問題は機械の  
チューンナップなのだよ。確かに機械装甲の部分を強く、軽くすれ  
ば大抵の攻撃には傷つかずにすむだろう。しかし、このままでは生  
身が機械に耐え切れずに魔力に頼るだけの戦闘機人を造ることしか  
出来ない」

研究員「もういつそのこと全身を機械にしてしまえばいいのでは？」

研究員「それだ！！」

『それだ！！じゃねーよ！つーかお前ら手に持つてるフィギュアは  
なんだ！ロボット造りたいだけだろ！』

ジェイル「それが1番手っ取り早いのだがね、スポンサーはあくま  
でも半人半機を所望しているのだよ」

オタ研究員「そ、そんな！我々の○・T・フィールド計画が！」

『この世界にもガンダ○とか○ヴァあんの！？』

ジェイル「A・○・フィールドがなにかは知らないが対魔力フィー  
ルドは可だよ」



いつかなかったのだろうね！！この研究員達は！自動で付与魔法エンチャントをかける機関を造ればいいのだ！！」

なにさりげなく自分は違うみたいな雰囲気だしてんのこの人？

とりあえず高笑いが止まりそうにないジェイさんはほっというて真面目な研究員の人と話すことにしよう

研究員「後は戦闘機人に適した遺伝子と受精卵が必要ですな」

『培養液の中でどれだけ人間の形を作れて戦闘機人化にも適合できるようにしなければなりませんからね』

ただ何兆を越える遺伝子から適合する遺伝子を見つけるのに何年かかるか……………考えたくないな

研究員「クローンを造るわけにはいきませんが、プロジェクトF A T E の記憶の複製転写技術で赤子の脳シナプスネットワーク（誕生二ヶ月前から二歳程度までにある）に干渉し、特定の人物の記憶を素体に転写して生まれた瞬間に自立可能にしなければいけませんね」

『教える時間がもったいないですからね』

……………やっぱり成功体完成までに3年はかかるんじゃないか？

まあ、そんなこんなで高笑いするジェイさんをほつといて優秀なス  
タッフ達と研究に勤しんだ

〈閑話〉

オタ研究員「武装にファン〇ルをつけていいかな？」

『却下!』

女性研究員「はあはあ……………無人君、ちょっとこっちに来てくれない？怖くないから」

『うわああああ!..!』

## No.1が出来るまでの日(笑)

この間、問題は解決したかと思われていた戦闘機人開発プロジェクトだったが、俺は思わぬ落とし穴を発見してしまった

その問題を発見したとき俺は少なからず『は？この研究員って人間止めてんですか？時間がないとか言い訳ですよコノヤロー、いい大人が数十人も集まってるくせに何してんの？』と思った

今日、俺はそのことについて議会すべく長い机の座っている。1番奥が俺、俺の右斜め前がチーフのジェイさん。左斜め前は優秀で真面目だと思っていたらチーフ補佐だった人。並び方は奥が偉い人、手前から下っ端というよくあるパターンだ

勿論、皆碇パパの格好（机に両膝ついて顔の前で手組）

『全員揃いましたか？それでは会議を始めます。なにか異論はありますか？』

俺の発言に皆さんは沈黙したまま動じない

『ないようですね。それでは副チーフ「ちょっと待ちたまえ」………  
…なんですかジェイルチーフ、異論は無かったのでは？』

俺が副チーフに話しかけようとしたらジェイルチーフから待ったがかかった。異論があるんならさっき言えよ空気よ……げふんげふん

ジェイルチーフの手組を解いて現れた顔は今だかつて見たことのない困惑した顔だ

ジェイル「……そもそもこんな下らない『下らなくはありません。重要です、ジェイルチーフはことの重大さが分かってないみたいですね』……さつきから気になっていたんだがそのジェイルチーフという呼び方はなんだい？」

……はあ、まさかそんなことも分かっていたななんて

そんなの決まってるだろ

『ノリですよノリ』

ジェイル「……無人k『ここでは議長と呼ぶように』……無ひ『議長と呼ぶように』……議長』

『なんですかジェイルチーフ、発言を認めます』

ジェイル「研究に戻っ『ふざけんな』!？」

『はあ……ジェイルチーフは議会での進行を妨げるのでこれから一切の発言権を許しません。では副チーフ、今回の議題を』

副チーフ「はっ!」

副チーフがスクリーンに投影する



そしてそこに書かれた文字が今回の議題だ

『よろしい、ではこれより、【ご飯は一日三食しっかりとうつ】を始めます』

まるで子供が書いたかのような可愛らしい文体がなんとも場を和ませる

ジェイル「君達もしかなくとも真面目にする気ないだろう!？」

副チーフ「ひゅーひゅーイエーイ、ドンドン」

ジェイル「……副チーフ……」

なぜかジェイルチーフが副チーフを見る目は生暖かい、別人を見るような目になってしまった

そう、真面目だった彼はもういない

それはさておき……

『一切の発言は許さないと言っただけです』

副チーフ「歯あ食いしばれー」

スパーン

ジェイル「なぜハリセンなんだね？歯を食いしばる必要がないのだから」

副チーフ「喋らないで下さいねー」

笑いながら軽やかに言う副チーフの右手にはエクスカリバーと彫られたバット

『回数に比例して段々強くなります』

ジェイル「そういうのはもっと早イタいつ!!」

副チーフのエクスカリバーがジェイルチーフをそれなりに強打した叩かれたジェイルチーフは真面目に痛そうだ

ジェイル「……………」

『さて、ジェイルチーフが黙った所で話しを進めましょう。それでは副チーフ、今日、ジェイルチーフが僕に「夕食だ。しっかり栄養を補給したまえ」といって手渡した物をこちらへ』

副チーフ「はっ!どうぞ」

そついつて副チーフが机に置いたのはサプリメントとフリスク

.....  
.....

.....  
.....  
.....  
『違うだろー！おかしいだろー？ばつかじゃねーの！？どこに夜ご飯がサプリメントとフリスクの家庭があるんですか！？そんな家悲し過ぎるわ！せめてカップ麺にしるよ！ー！っ！かなんでフリスク！？こっちに至っては栄養薬品ですらねーよ！ー！』

ばしーん！ー！

手に持っていたフリスクを机に叩きつけた

ジェイル「.....」

『なんか言って下さい！ー！』

ジェイル「ごふうっ！ー！ええええ！？私に発言権はなかったのではないかね！？副チーフ！金属はやめたまえ！金属は！ー！」

副チーフは残念そうに一発入魂というペナントが貼られた金属バットを下ろした.....と思ったら素振りしだした

.....俺って取り返しのつかないことをしたんじゃ？

『まあ、副チーフはおいといて。ジェイルさん、もう喋っていいですよ。』

ジェイル「議長の『俺の名前は無人です』……無人君の言い分は分かった。だがね、食事とはただ栄養補給が出来ればいいのだよ。味は副産物に過ぎない」

『……………ジェイルさん、コーヒーはブラックを飲んでますよね？』

「それがどうかしたのかい？」

『栄養補給とかいって糖分摂取してないじゃないですか！味は副産物？ふざけるのも大概にして下さい！！結局味優先じゃないですか！！このマダオー！！【マッドで駄目でオレンジ野郎の略】食欲は人間の三大欲求なんですよ？味がいいほうが満足するでしょう』

ジェイル「……………しかしだね、ここにいる全員が料理出来ないのだよ」

『……………は？』

え？女性も結構いるのに？  
いやいやいや流石にそれはおかしいでしょ

『副チーフ、本当ですか？嘘だったら潰しますよ？ジェイルさんを』

副チーフ「嘘じゃないです」

『本当に？』

副チーフ「本当です」

『マジで？』

副チーフ「マジです」

『ガチ「現実を受け止めるものだよ無人君」』

目の前に視線を向けると机に座ってる全員が碇ポーズのまま頷かれた

……………ええ……。そんな息ぴったりに頷かれても困るんだけど

『十人以上いるのに誰も料理出来ないなんて無能もいいところじゃないですか（全く、仕方ないですね）』

ジェイル「本音と建前が逆だよ」

『……………はあ、分かりました。食事は全部俺が作りますから最低一日一色は食べて下さい。もし生まれてくる子（戦闘機人）達にそんな食生活させたらぶん殴りますからね？』

ジェイル「そんな物騒なことを私を見て言わないでくれないか」

副チーフ「……………そうですね、サンドイッチなどの軽食なら手間がかからずに食べれるんじゃないですか？」

『だそうですよ？』

ジェイル「……………はあ、分かったよ。研究の効率が下がるのは頂けないが無人君の想いを無下にするのもなんだからね」

ジェイルさんは降参とでもいうように肩をすくませている

『本当ですか？もし食べなかったら口に擦込みますよ？』

ジェイル「……感動する場面なんだがね。……ちゃんと食べるよ」

……その間は何ですか

その次の日に服や風呂に入る回数などの議会が行われるのは余談である

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6910z/>

---

戦闘機人TYPE1st

2011年12月25日21時50分発行